

## 災害大国は防災大国になれる

-NPO法人プラス・アーツの活動紹介-

NPO法人プラス・アーツ理事長  
永田 宏和

### はじめに

今日は防災におけるプラス・アーツの活動を紹介させていただきますが、海外の実例も併せて紹介しながら進めていきたいと思えます。また最後に本日せっかくお集まりいただいたので、在宅避難用のおすすめ防災グッズを紹介します。是非参考にさせていただきたいと思えます。

活動報告をする前に、活動に対する考え方・理念について話したいと思えます。これは街づくりや地域の支援にも共通した考え方で、町内会とか地域の活動支援をされている方々にとっても参考にさせていただけると思えますので、先ずこの話から入りたいと思えます。

### 地域豊饒化における「風」「水」「土」「種」の話

地域の支援をする時に大切な考え方は、「地域豊饒化」です。聞きなれない言葉ですが、対になる言葉として「地域活性化」や「経済活性化」といった言葉があります。

経済をひたすら伸ばすために日本の社会は頑張ってきたわけですが、そのプロセスの中で住宅需要を増やすために核家族化が進み、住宅需要を創り出してきました。しかしこれにより家族の絆は崩壊に向かいました。これと同じことが地域のコミュニティでも起こり、多くの都会で現在、祭りはやってない、餅つきもない、隣に住んでいる人も知らない、挨拶もしないという状態です。一番よく感じるのは、地域の人たちが笑っていないことです。

今は時代的には人口大減少時代で、これからは右肩下がりで人口は急降下していきます。神戸市は今、人口150万人強ですが約40年後には110万人になってしまいます。高度経済成長期に地域活性化の名の下に失ったものが沢山あります。今、私たちがやらなければならないことは失ったものを取り戻す作業です。地域の人たちが元気に生き生きと暮らしている街の方がよほど豊かです。そのような目標・ビジョンを何と言えいいのか、それは「地域活性化」ではなく「地域豊饒化」です。地域を豊かにする活動なのです。

地域豊饒化を目指すためには、右図の様に「風の人」、「水の人」、「土の人」という3つの役割・存在が必要だということ、長年の地域活動支援の経験で分かってきました。それぞれの人にはその作法・役割があります。

土着、土地の人、地域に暮らす人、動かない存在・そこに居続ける存在など、地域住民のことを「土の人」と呼んでいます。

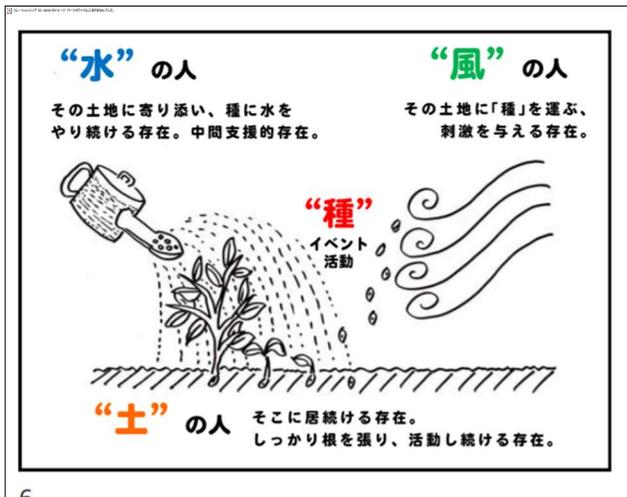
昭和初期から大正・明治に遡ると地域のコミュニティは豊かでした。土の状態というと肥沃な状態です。

「種」は活動のことで、祭り、餅つき、防災訓練などの地域活動を示します。このような「種」を植えても土

が水分や養分をしっかりと含んで肥沃であれば、誰の力を借りなくても勝手に芽吹き、育ち、果実を実らせ、種を落とし、また芽吹き、…といったように、循環、つまり自立できていました。豊かなコミュニティで行われている活動はサステナブルです。地震が起こっても助けあい、支え合い乗り切っていました。いまは祭りをやっても地域の人はお客さんで、浴衣を着て行くイベントにすぎません。防災訓練をやっても誰も参加しないし、いつも同じメンバーというのが実状です。

私はこのように困っている状態の「水の人」たちから呼ばれ、どうすれば打破して循環できるよう

**地域の防災を多世代で  
盛り上げるためには、  
「風の人」「水の人」「土の人」  
の存在が不可欠です。  
↓  
そして、  
それぞれの「人」には、  
それぞれの「役割」があります。**



になるのか、といろいろ助けを求められます。それに応え、状況を打破する種をつくり、持っていく（紹介する）役割を担うのが「風の人」です。私が呼ばれるのは「風の人」だからです。その地域外にいる、いい種をつくれる専門家です。

真っ先に着手できるのは品種改良です。種を作り変えることです。枯れた状態の土地にも効くような強い種を作れる人がいま全国で、もっと言えば広く世界で求められています。「風の人」は種を品種改良して「強い種」を作って風に乗せて各地に紹介する人です。しかし持って行って紹介することはできますが、その地域に住んでいるわけ

はないので、そこで水をやって育ててくれるパートナー的な人が必要です。それが「水の人」です。

みなさんの多くが、町内会や地域の活動に参加されている「水の人」だと思います。他の地域に目を向けても全国的に「水の人」は層が厚いと思います。水をやる準備はできていても、「強い種」がないのが現状です。昔ながらの古い種を植えて、水をやっても、もう芽は出ません。この状況を変える必要があります。

実は私は「風の人」です。いま全国で「強い種」を作る人が求められているのでよく呼ばれます。地域の「水の人」の要請で「強い種」を持って全国を回っています。しかし全国の多くの地域がいま「風の人」欠乏症になっています。そんな状況を踏まえて、今神戸で「風の人」の育成を行っており地域の問題の解き方、つまり「強い種」の作り方を教えています。だいたい「風の人」の予備軍が育っています。

**私は、「風の人」です。**  
**皆さんは、「水の人」だと思います。**  
**「水の人」である皆さんが**  
**地域住民である「土の人」の**  
**防災力を向上させるいい種を**  
**紹介して、育ててもらいたいと**  
**思っています。**

### いい種の持つ2つの特徴

今日はよい機会なので「強い種」をつくる2つの極意をお伝えします。

① 1つ目の特徴は、「不完全の方がむしろ良い」ということです。関わりシロがある・余地があるということ。余地があれば、地域の人に、関わっても良いのだ、自分たちの仕様にしても良いのだ、と思わせることです。一緒に作りかえてほしい、といえるかどうか。いろんな人が関わることができて、一緒に作ったものは「自分たちのもの」になるのです。他人ものではありません。このプロセスが非常に重要なのです。地域で行われている行事は、おおよそこうはなっていません。浴衣を着て遊びに行くのが祭りであり、自分たちが祭りをつくる側のプロセスに参加できるものではありません。だから地域活動の多くのものがお客ばかり作ってしまっていて、誰も手伝わなくなっているのです。

私が地域の町会長さんにアドバイスすることは「弱音を吐いてください」です。助けて欲しい、手伝って欲しいと、正直に言えば助けてくれる人は沢山います。地域で助けを求める時のコツは「具体的に言うこと」です。「誰かイベントを手伝ってくれませんか？」ではテーマが大きすぎて誰も手伝ってくれません。「人形を作れる人、洋裁の得意な人、絵が描ける人いませんか？」のように具体的手伝ってほしい内容を伝えることです。このパターンで助ける人が出てこなかったケースは見たことはありません。誘う時の姿勢と具体的な誘い方で地域の人を誘い込めるチャンスはまだまだ残っているのです。

② 2つ目の特徴は、忙しい世の中ですから「つまらないものを手伝ってくれ」と言っても関わろうとしてくれないことです。「プログラムが魅力的であることも必要」です。感動できる・夢みたい

な・楽しそうなど、魅力があふれていて人は初めて心が動くものです。興味・関心を抱いて近づいてきたら、手伝える・一緒に作れる、の次の段階に進みます。この二段構えが必要です。子供も高齢者も企画したり、創ることが大好きで楽しいのです。こういう体験が世の中で非常に少なくなってきたのも事実です。実際に巻き込んでしまえばその後は結構うまくいくのですが、世の中このようにはなっていないのが現状です。このような状況を打破しなければ、まちづくりの世界は変わりません。

以上の二つの特徴・コツで今までやってきましたが、ほぼ失敗したことはあまりありませんので是非参考にしてみてください。

### 「+クリエイティブ」の意味は

「+クリエイティブ」とは創意工夫です。“今まで行ってきたことをそのままにしないで、もう少し工夫したら如何ですか”ということです。また新しいアイデア、工夫で子ども対象のイベントを作るときに一番アイデアがあふれているのはテレビ番組です。テレビ番組には様々な仕掛け方の要素が含まれています。私たちが作った新しい形の防災訓練で実施している体験プログラムは、ほとんどがテレビ番組から引っ張ってきたもので、楽しく学べるようになっていきます。子どもやご家族にとっては魅力的なイベントになっていますので、チラシでうまく告知さえできれば確実に人は呼べます。

今の世の中では現在行っていることを焼き直すしかありません。ゼロから新たに作るにはお金がかかりすぎます。私が行っている地域の防災訓練に対する支援では今までやっていたことを「焼き直す」ことから始めています。

そのためにはこれまでのプログラムを

- ・根元から考え直してみ
- ・既成概念にとらわれず
- ・広い視野で
- ・違う角度から
- ・情熱と愛情を持って考えて見ること、が大切です。

地域の人と話をして一番の障壁は伝統・しきたり、などのしがらみだと思えます。変えることに対する恐怖や拒絶感が一番大きいと思えます。したがって、これを乗り越えて変えることを決意した地域は強いと思えます。新しい方法を示しても皆さんで力を合わせて取り込み、どんどん発展させていきます。可能性は広がっていますので「変える決断」が最も重要だと思えます。

### 「プラス・アーツの活動」とは

独創的に取り組むこと。

既成概念に捉われず、新しい発想で取り組むこと。

防災訓練では人は呼べないので右図の様に、おもちゃの交換会「かえっこバザール」と銘打って人を呼びます。そして参加した家族がいわばついでに、防災訓練をして帰るという仕組みを考えました。防災だけを忠実に行っていたら防災訓練の世界は変わらなかったと思えます。それぐらい防災という言葉は仰々しく、微塵もワクワク感はありません。来てもらわない限り、教えることはできないのです。

我々が防災訓練の世界を変えられたのは、そこに踏み込むことができたからです。しかし始めた当時は、「ふざけてる」、「遊んでいる」、「防災を冒涇している」などバッシングの嵐でした。



イベントが楽しいと子供たちは夢中になり、自主的に学ぼうとして、何回も繰り返し体験します。今では、大阪教育大学の先生たちが、カエルキャラバンの効果検証を行っており、教育効果が高いことを実証し学会で発表しています。体験学習型のカエルキャラバンが学術的にも評価されています。

カエルキャラバンのプログラムは被災者の声を直接聞き、被災地で実際に役に立った知識や技を基にしてプログラムを作っています。例えば、一般的に灯りの備蓄は「懐中電灯」だと言われていますが、実際は両手が使える「ヘッドライト」が必要だったと被災者は語っています。他にも、釘やささくれ立った木は軍手を突き破りケガをするので、軍手よりも「皮の手袋」が有効だとされています。

世の中の情報は固定化しがちですが、私たちが出している情報は被災地での生の声をそのまま伝えています。カエルキャラバンは見た目は楽しく見えますが、そこで伝えている知識や技は被災した時に有効なモノばかりです。だから胸を張って揺ぎ無くプログラムを実行できるのです。



テレビで出てくるプログラムをうまく活用すれば有効です。テレビはいくら面白くても観るだけで参加することはできません。カエルキャラバンではそれと似たようなプログラムに参加できるので人気となり、行列までできるのです。さらに、列で順番を待っている間にも火災に関する紙芝居形式のクイズなどで徹底的に情報を植え付けます。最後に消火器の使い方を体験を通して学んでもらいます。毛布担架競争も軽い人形を運んでも実際の体験にはならないので、2Lのペットボトル20本(40kg)を人形の中に入れて人間に近い重さにして毛布で運んでもらうことで、より現実的で

有効な体験学習プログラムにしています。

防災の知識に関してはボードゲームを作って学習できるようにしています。これらは1年以上の開発期間がかかります。ゲームを作ってはカエルキャラバンでテストをして子供の反応を見ながら改良を加え最後に防災の先生に監修してもらい完成させました。このような教材を開発することによって実際に我々が現場に行かなくても防災教育が出来るようになりました。今では英語版や中国語版も作られており、海外でも広く活用されています。

## カエルキャラバンのシステム

おもちゃの交換会「かえっこバザール」で家族を集める仕掛けになっています。先ず右図のような「楽しそう!」と思わせるチラシを地域に撒きます。このチラシをパッと見ても防災のイベントには見えません。

使わなくなったおもちゃを持ってくればポイントに変えてくれます。そのポイントで他の子供が持ってきたおもちゃと交換できます。防災訓練に参加するとさらにポイントが溜まる仕組みになっており、参加した子どもたちは、人気のあるおもちゃが出品されるオークションに参加してお目当てのおもちゃをゲットするために、何度も何度も防災訓練に参加してくれます。手の込んだ仕掛けですが、ここまでしないと防災訓練に地域の家族が参加してくれないのが実情です。

この仕組みが話題となり、全国の防災訓練で導入されるようになりました。結果として2019年度まで、全国各地の北海道から沖縄まで36都道府県で560回以上の開催支援を行ってきました。これは全て、全国各地の地域から支援してほしいと頼まれて取り組んだもので、自分たちから働きかけたイ



ベントは一つもありません。

支援の依頼が来たら、先ず講義をして、そのあと実技指導をします。最近では事前研修だけ行って当日は現地にプラス・アーツのスタッフが行かないこともあります。

### 地域での取組み事例

地域での取組み事例として墨田区の寺島地区では約12年前に現地に指導に行きましたが、現在では指導して導入したプログラムはほとんど行っていなくて、全て自分たちで作り変えて実施しています。地域の人たちで協力して子どもたちが喜ぶプログラムにドンドン作り変えていった結果です。これをローカライズ(地域色に染まる)と呼んでいます。カエルキャラバンの真骨頂はこのローカライズです。またもう一つのポイントは「お祭り」です。防災をテーマに皆さんで祭りを立ち上げているのです。こうなると防災関係者だけではなく地域の様々な人や団体が協力します。お年寄りだけが集まる一般的な防災訓練と違って、お祭り型の防災訓練はとてもいい雰囲気です。毎年沢山の人が集まるので主催者側もより良い「祭り」になるよう前向きに取り組めますので、より充実した内容になって参加している家族も学びが深くなり、主催者側もどんどん元気になって相乗効果が生まれます。

沖縄の事例ではもうカエルキャラバンではなく、カエルが「ヤモリ」に代わっています。ヤモリは沖縄では守り神です。プログラムも全てローカライズされていて、本来は「カエルとおたまじゃくしの親子劇場」だったのが、沖縄ではキャラクターが変わり「シーサー劇場」になっています。

また地域によっては高校生が主体になって小学生に教えるカエルキャラバンがあったり、子どもが少ない地方では、「防災キッズ」というサークル活動を通して防災の知識や技を学んだ子供たちが、地域に沢山いる高齢者たちに地域の防災訓練のなかでブースを出して教えたりしています。また企業の社員がカエルキャラバンを使って地域の人たちに防災を伝えている活動などもあります。

### 海外での広がり

2007年から海外でもカエルキャラバンの支援を始めました。海外の場合は、ほぼすべての国でローカライズされており、インドネシアはカエルが小鹿に代わり「小鹿キャラバン」になったり、フィリピンではサルを使って「モンキーキャラバン」になったりしています。つまりシンボルキャラクターが国によって変わるということは、それぞれの国で独自に続けてゆくという覚悟が決まった証なので、もう日本からの支援は必要ないということを意味しています。そこに「強い種・魅力あるイベント」があるかどうかで地域や海外の人たちも変わりますので、今は「強い種」が国内外の各地で求められているように感じています。

### ネパールでの事例

ネパールでは小学校の中に防災クラブを作る活動をしています。まず、防災クラブの顧問になってもらうモデル校の先生たちに日本のプログラムを紹介しながらトレーニングを行いました。次にローカライズによってネパールのオリジナルなプログラムを作ってもらったり、それぞれの学校の状況に合わせてクラブの活動計画を立ててもらいました。また、クラブのシンボルキャラクターも先生たちに人気投票で決めてもらいました。最終候補にレッサーパンダと一角サイが残り、決選投票の結果、強い動物の象徴である「一角サイ」に決まりました。

ここからシンボルマークを作るわけですが、ネパールでシンボルマークをデザインできるような力量のあるデザイナーに出会えなかったので、日本のトップデザイナーの寄藤文平さんにデザインしてもらい日本から右図のようなシンボルマークをネパールの防災クラブにプレゼントしました。一角サイの角と、“いいね”の親指とを掛け合わせて表現しています。



各防災クラブの子どもたちが集合写真を撮る際の「決めポーズ」もこれで決まりました。また教材は地元のデザイナーに作り替えてもらい、地元でのメンテナンスをやすくしました。また手書きの教材もデジタル化して印刷すれば使えるようにしました。これは、クラブ活動が他の学校に広まり、教材を増刷していくために絶対に必要な作業です。

現在ネパールには防災クラブ以外にも環境クラブやボランティアクラブなど色々ありますが、モデル校では防災クラブが一番人気のクラブになっているようです。また予期しなかった効果が出始めています。元々は、顧問の先生たちが、自らが作った防災教材を使ってクラブメンバーの子どもたちに防災の知識や技を教えることがベースだったわけですが、クラブ活動が運営されていく中で、子ども同士で教えあったり、防災クラブ以外の生徒に教えたり、地域のコミュニティのメンバーに教えたりするようになってきました。これはまさに想定外の嬉しい波及効果でした。ネパールにはコミュニティ防災・自主防災組織が存在しないので、防災クラブを中心にコミュニティ防災活動をしようという計画を作って、これから活動していこうと考えています。

現在ネパールには防災クラブ以外にも環境クラブやボランティアクラブなど色々ありますが、モデル校では防災クラブが一番人気のクラブになっているようです。また予期しなかった効果が出始めています。元々は、顧問の先生たちが、自らが作った防災教材を使ってクラブメンバーの子どもたちに防災の知識や技を教えることがベースだったわけですが、クラブ活動が運営されていく中で、子ども同士で教えあったり、防災クラブ以外の生徒に教えたり、地域のコミュニティのメンバーに教えたりするようになってきました。これはまさに想定外の嬉しい波及効果でした。ネパールにはコミュニティ防災・自主防災組織が存在しないので、防災クラブを中心にコミュニティ防災活動をしようという計画を作って、これから活動していこうと考えています。

## 防災イベント

NPO法人プラス・アーツは様々なプログラムを開発しています。防災とキャンプを組み合わせ「レッドベアサバイバルキャンプ」や、昨年スポーツ長官賞を頂いた、防災とスポーツを組み合わせた「防リリーグ」などプラス・アーツのホームページに詳細に紹介されていますので一度ご覧ください。



## 防災講座

現在プラス・アーツは防災講座の講師を育てることに力を入れています。埼玉県では既に700人以上の県民講師が育っています。研修を受けた県民講師には、特典としてスライドデータや配布資料を、県を通じて渡すようにしています。

防災講座の講師養成研修は4時間くらいの時間をかけてじっくり行います。同様の取り組みを堺市でも行っていますが、防災の部署ではなく福祉局が行っています。つまり介護予防の実証実験として防災講座の講師ができるようにするためです。

高齢者が地域で防災の講師になると色々な所から声がかかるので、忙しくなり防災講座の講師役が生きがいになります。すると行動変容がおこり、オシャレになったり、趣味が増えたりします。

今神戸で男性高齢者問題の対策として行っているのはパンを焼ける「パンじい」で、大変人気となり、子供食堂や認知症カフェなどでパンを焼いてほしいと引く手あまたの状況です。

現在、国をあげて介護予防を行っていますが、そのほとんどが体操です。体操の効果として体は元気になりますが、心は元気になりません。「パンじい」はあちこちから呼ばれて生きがいになります。この成功事例で次々と新しい取り組みが増えました。「コーヒーじい」「マドレーヌじい」「カレーじい」などです。これから取り組もうと構想しているのが「ピザじい」「BBQじい」などです。関西では色々な自治体から男性高齢者向けのプログラムに関する引合いが来ています

## 在宅避難に必要な備蓄量(一週間分の備蓄)

コロナ禍の今は在宅避難が重要です。在宅避難の準備としては、家具の転倒防止やハザードマップを調べるなどがありますが、防災グッズに関しては十分な備蓄量がとても重要です。いま国が要求しているのは一週間分の備蓄です。

- ・水：2L/一人/一日 4人家族の場合：2×4×7＝56L つまり 2L6本入りケース5箱必要  
家の中で分散して置き日付を明記する。
- ・ポリ袋：ゴミ袋200枚(最低ライン)  
断水の場合2枚重ねで段ボール二箱に入れて水を運ぶ  
マンションの場合は登山用リックにゴミ袋(2枚重ね)を入れて水を運ぶ  
トイレの断水の場合はゴミ袋の中に新聞紙をちぎって入れて後で、消臭剤で処理する
- ・新聞紙：朝刊2カ月分  
印刷前のザラ紙をネットで購入できる(10Kg/¥2000位)。吸収材として使う
- ・ラップ：30cm幅のラップ数本  
断水で食器が洗えないので食器のカバーとして使用
- ・LED ランタン：3台必要(リビング、キッチン、トイレ)  
ヘッドライト以外に必要  
携帯のスポットライトにペットボトルを乗せるとランタン代りになる
- ・ヘッドライト：家族の人数分
- ・携帯ラジオ：単機能
- ・電池：単一電池(ランタン用) 10本3パック(30本)  
単三電池(充電器用) 12本4パック(48本)  
単四電池(LEDヘッドライト用) 12本3パック(36本) 電池は10年保存可能
- ・ウエットティッシュ：100枚入り7箱(700枚)/家族4人一カ月  
ローリングストック法で使ったら買い足して使用
- ・保存食：冷蔵庫・冷凍庫の中の食料を災害後の3日間順に食べていき4日目以降非常食を利用する  
ローリングストック法の非常食(1年)を少し多めに保存
- ・カセットコンロ用ガスボンベ：15～20本/1カ月  
約6-7年保管可能
- ・携帯トイレ：シートタイプを購入で最低60～70枚/1カ月

今日お話しした内容がカエルキャラバンの中で一番人気のある講座です。この講座ができるようにインストラクター研修をしています。またこの講座を地域で行うと評判になると思いますので、佐倉の皆さんがこの講座の講師になってみたいなど何か実践してみたいと思われたらプラス・アーツで支援いたしますので、お声がけしていただければ幸いです。

## 【質疑応答】

- Q:** カエルキャラバンで子供が担架を作ったり、消火器を操作したりしていましたが、実際に災害が起こった場合、子供は保護される立場だと思いますが、カエルキャラバンは将来大人になった時に役に立つようなプログラムだと理解していいでしょうか。
- A:** 正にその通りです。このプログラムを始めた頃は、子供に消火器の訓練をした後、実際に火事があった場合子供が火事に立ち向かってしまわないか、などの議論がありましたが、実際に消火器の訓練の後に子供達には、“実際に火事が起こった時は火事だ!! と叫んで大人を呼ぶように”と指導しておりこの訓練は大人になってから行うようにと伝えていきます。子供の時には訓練をしない方が良いという人もいますが、どこかで訓練をしておけば必ず記憶に残って役に立つと思うので消火器訓練は今でも継続して実行しています。

## 永田 宏和（ながたひろかず）先生のプロフィール

- ・防災プロデューサー
- ・NPO 法人プラス・アーツ 理事長
- ・デザイン・クリエイティブセンター神戸 センター長
- ・株式会社NPO都市文化創造研究所 代表取締役

### ■略歴

1968年兵庫県西宮市生まれ。

1993年大阪大学大学院修了。

2005年阪神・淡路大震災 10周年事業で楽しみながら学ぶ新しい形の防災訓練

「イザ！カエルキャラバン！」を開発したことをキッカケに NPO法人プラス・アーツを設立し、理事長に就任。その後、同プログラムを首都圏、関西圏、などを中心に全国35都道府県で展開。

2007年にジャワ島中部地震の被災地・ジョグジャカルタで「インドネシア版イザ！カエルキャラバン！」を開催以降、その活動の輪は、中国、台湾、タイ、フィリピン、イラン、トルコ、中米、南米のチリ、ペルーなど世界21カ国に広がっている。全国各地の自治体が主催する講演会、講座の講師や東京メトロ、無印良品、三井不動産グループ、NHKなどの企業・メディアが展開する防災プロジェクトのアドバイザーも務める。

### ■受賞

『第6回21世紀のまちづくり賞・社会活動賞』受賞、

『第14回防災まちづくり大賞消防科学 センター理事長賞』受賞、

『第1回まちづくり法人国土交通大臣賞【まちの安全・快適化部門】』受賞。

国際交流基金『地球市民賞』受賞。

JICA理事長賞受賞。

NHK・Eテレ「東北発☆未来塾」、TBS『情熱大陸』、日本テレビ『世界一受けたい授業』出演。

### ■主な著書

『地震イツモノート』（2007年木楽舎刊、2010年ポプラ社刊）※企画を担当

『親子のための地震イツモノート』（2011年ポプラ社刊）※企画を担当

『地震イツモマニュアル』（2016年ポプラ社刊）※プラス・アーツが監修を担当

『クレヨンしんちゃん防災コミック 地震だ！その時オラがひとりだったら』（2016年双葉社刊）

※監修を担当

『“今”からできる！日常防災』（2019年池田書店刊）※監修を担当

『防災イツモマニュアル』（2020年ポプラ社刊）※プラス・アーツが監修を担当

『保存版 新しい防災のきほん事典』（2021年朝日新聞出版刊）※監修を担当

『つくって役立つ！防災工作』（2021年学研プラス刊）※プラス・アーツが監修を担当

以上